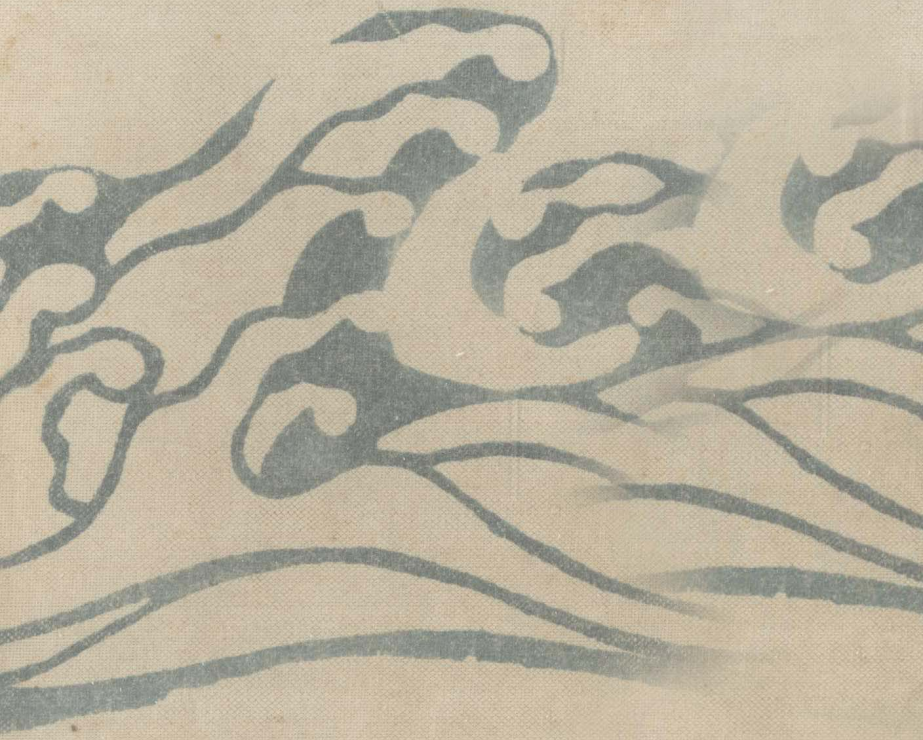

十七

海音寺潮五郎全集

海音寺潮五郎全集　第十七巻
武将列伝　下
全二十一巻・第十三回配本
九〇〇円

昭和四十五年十月二十日発行
著者　海音寺潮五郎
装幀　芹澤銈介
口絵　中尾　進
発行者　大田信男
印刷所　凸版印刷

発行所　朝日新聞社
東京　大阪　北九州　名古屋

目次

武田勝頼　三
竹中半兵衛　四六
前田利家　六五
黒田如水　九三
蒲生氏郷　一二四
真田昌幸　一七二
長曾我部元親　二〇三
伊達政宗　二三五

石田三成　二五五
加藤清正　二八四
立花一族　三一三
真田幸村　三五一
德川家光　三七二
西鄉隆盛　四〇四
勝　海舟　四三三

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

武将列伝 下

昭和三十四年一月―三十五年十二月「オール読物」ほか

武田勝頼

一

甲斐の国は地味磽确で、物産が少なく、米が経済の中心をなしている時代には、一国だけでは大をなしかねる国であった。だから、武田信虎がこの国に割拠している諸豪族を征服統一すると、どうしても他国を切りとらざるを得なくなった。弱肉強食の戦国の時代であるから、強いが上にも強くなっておかないと、他の好餌となるからである。

しかしながら、南方は家柄といい力といい東海一の今川家の領国駿河であり、東方は関東一の北条氏が拠有しているし、北方は山岳地帯であるし、西の方中部信州に向うよりほかはなかった。水は最も抵抗の弱いところを破るものだが、当時の信州はその地勢上、強大な統一勢力がなく、各地に小豪族が割拠していた。武田家にとっては最も食べやすい状態におかれている美肉であった。

しかし、地理的に言って信州への最も出易い出口である諏訪には諏訪氏がいた。諏訪神社の祭神建御名方命の子孫として諏訪の上社の代々の宮司となり、そのへん一帯を領有している。その地方の信仰と富力と武力とをあわせ持っているのだから、なかなか強い。信虎は度々攻撃してみたが、抵抗が強くて、うまく行かない。

そこで、諏訪氏と和睦し、鋒を転じて、八ガ岳山塊の東側から入って千曲川に沿って北進して海野（今の上田）地方に出る道をとった。信虎の長男信玄――当時晴信――が海野口城主平賀源心入道を討取って城をぬいたという名誉の戦功をあげたのは、この期間のことである。

信虎は諏訪氏を調略によって強力な味方にすることを考え、六女の禰々を諏訪家の当主頼重の妻にやり、聟引出として小県郡の長窪城までやって、信州経略のお先棒をかつがせることにした。頼重には当時もう夫人があって、その間に娘が一人あったのだから、それを側室におとすか、離縁するかして、禰々を迎えたわけだ。当時の大名と称する連中のあさましさであり、当時の女のあわれさである。

これは天文九年の十一月のことであった。

この翌年、すなわち天文十年の六月、信玄は老臣らとしめし合わせて、父の信虎を甲斐から追い出してしまった。

当主がかわると、信州経略法もかわる。信玄は海野口のような嶮岨な道から兵を出し入れするより、平坦な諏訪口からした方が便利であると考えた。そりゃ便利にちがいない。信虎だってはじめはこちらから入ろうとしたのだ。

信玄は諏訪家の内部の勢力争いを利用し、頼重の反対党を抱きこんでおいて、いきなり兵を出して、頼重を攻め潰してしまった。

頼重が先夫人に生ませた子はこの時十四であったが、初花の匂うがごとく、絶世の美少女だったという。信玄は一目見て、うっとりとなり、ついに枕席に召す。

ひどい話である。自分が攻め殺した者の娘を抱いて寝ようとは、尋常の神経ではない。しかし、この時代にはしばしばあったことである。戦国という時代のおそろしさだ。世が狂えば人も狂う。人間の持っている、ものに慣れるという機能は、環境にたいする順応性にもなって、人間を艱苦苛烈な環境の中にも生きつづけさせてくれるのであるが、一面では良心を鈍麻させる作用もあるのである。最もあわれなのは、頼重の娘だ。まさしき父の讐に抱いて寝られねばならぬのである。またしても言うが、当時の女はあわれであった。

もっとも、女のあわれさは人類発生以来のことかも知れない。古代野蛮な時代の戦争では、女は最も普通な戦利品であった。女を掠奪することだけを目的として戦争が行われたことも多かった。これは少し前までのアフリカや濠州あたりの未開人の状態を考えればよくわかることだ。その場合、女達は父母や夫や兄弟らの讐の妻妾になるのである。女の人権が尊重されるようになったのは、文明社会でも、ごく最近のことである。

甲陽軍鑑では、信玄が頼重の娘を側室にしたいと言った時、老臣らが、

「おん敵の片われを、いかに女人とはいえ、お側に召しかかるることよろしからず」

と諫言したので、信玄もこまっていると、その少し以前から武田家に召しかかえられていた山本勘介が、

「殿はご器量人でおわせば、ご寵愛になっても乗ぜられるようなご不覚はござるまい。もし諏訪ご料人に若君でもお出来になれば、この若君をもって諏訪家をお立て下さるであろうと、諏訪家の遺臣共もお家に心を寄せるようになって、むしろ良い結果になることも考えられます」

と、老臣らを説き伏せたと記述している。

山本勘介は実在した人物であるが、山県昌景につかえたごく身分の低いものであったというのが、渡辺世祐博士の説だ。果してそうなら、そんな身分の低いものが武田家の老臣などにこんなことを説けるはずはない。甲陽軍鑑は軍学というものを樹立しようとの目的をもって編纂された書物だ、山本勘介というえらい軍学者をこしらえた方が都合がよい。まあ、そんなことから、こんな話も出来たのであろう。

二

勝頼は、この諏訪ご料人の生んだ人である。天文十五年の生まれである。四郎と名づけられた。

諏訪ご料人にたいする信玄の愛情は一通りのものではなかったようである。天文二十四年（弘治元年）に信玄は川中島で謙信と対陣しているが、途中今川義元に仲裁を頼んで、謙信と和睦し、大急ぎで甲府へ帰っている。この出陣に信玄はひどく手間取っている。ちょうどその時諏訪ご料人が病気だったのである。出陣の手間どりはそのためであり、義元に仲裁を頼んで講和することになると大急ぎで帰ったのもそのためとしか思いようがない。

信玄は利のためにはどんな残酷非道なことでもするドライな人のように言われており、またそう言われてもしかたのない面のあることは否定しようもないが、諏訪ご料人にたいしてだけは、こんなにもこまやかな心づかいを見せている。ぼくは信玄があまり好きでないが、ここのところは好きである。英雄にはこういうところがなければ魅力がない。

諏訪ご料人にたいする愛情がこうだったから、その生んだ子の四郎にたいしても、格別な愛情があったようである。父の子供にたいする愛情は、その生母にたいする愛情の反映である事例が多いのである。

しかし、諏訪ご前は、弘治元年か、その翌年に死んだらしい。確かなことはわからないのであるが、四郎が十か十一の時である。

四郎は永禄五年六月、元服したが、同時に諏訪家の名跡をつぎ、武田諏訪四郎勝頼と名のることになった。十七歳であった。

信玄には長男義信がいて、それがあとつぎになることにきまっていたのであるが、勝頼はこの兄を葬って自分があとに立とうと計画したと、改正三河後風土記にある。

この書物は徳川家側の書物で、徳川家びいきに書いてあるから、徳川家の強敵であった勝頼を悪く書いているのだとも思われるが、話の筋道がちょいとおもしろいから書いてみる。

永禄七年の頃、義信は、一人の美女を得て寵愛するようになったが、父のきげんをはばかって、信玄の重臣で自分の介添役である飫富兵部の家にあずけ、近習の長坂源五郎一人を連れて、毎夜忍んで行き、夜明けに帰るを常としていた。当時義信は二十七だ。大名の世子がこの年頃になれば、正室のほかに側室の二人や三人あるのは普通のことだし、父の信玄はまたこの方面には相当な道楽ものなんだからものわかりもよかろうし、はばかるところはなかったろうと思われて、この点でもいぶかしいのだが、それは一先ずおこう。

勝頼はこれ幸いと、目付や横目らに賄賂をあたえて買収し、

「若君は夜毎にご近習長坂源五郎一人を召連れられて飫富兵部の屋敷にまいられ、夜明けにお帰りであります。飫富の屋敷にはお傅役の曾根周防もまいって、人を遠ざけてご密談のていであります。これは早くお屋形様を失って、家

督を相続なさろうことの姦謀をめぐらす相談をなさっているのでありますとか」

と、信玄に訴えさせた。

目付どもの報告を聞いて、信玄は義信をおしこめ、飫富兵部・曾根周防・長坂源五郎らを捕えて糺明した。皆、

「さような覚えはござらぬ。何しにお屋形様にたいして不軌の心など起きましょう。口惜しきお疑いであります」

と、涙を流して言い、実はしかじかであると言いわけした。

信玄がこれを信じそうになったので、勝頼は第二の手を打つ。すなわち、信玄の侍臣や侍女に贈賄して、

「その叛逆の張本は飫富兵部でありますとか。飫富は若君の心をとらえて引き入れ申すため、その美女を召しかかえ、若君に奉ったところ、若君はついにその色香に迷い、飫富の叛逆の企てに同意されたのであると聞いています」

と、信玄に言わせた。

信玄はついにそれを信じ、飫富らを斬り、義信は三年の間幽囚して、永禄十年八月切腹させた。

以上が改正三河後風土記の記述である。

信玄が飫富らを殺し、義信を切腹させたことは事実であるが、これが勝頼の策謀によるというこの記述は信用出来ない。他の人なら知らず、信玄ほどの知将が、こんな浅はかな計略に乗ったとは思えないのである。信玄は義信らを殺さなければならない必要があったのだと、解釈したい。

永禄三年の桶狭間の奇襲戦で今川義元が織田信長に討取られた後、今川家はあとをついだ氏真（うじざね）が大阿呆で、とうていうまく行きそうにない。こういう家の領国は、戦国大名にとっては食膳の上の珍味にひとしい。

「おれが食わねば、北条が食うか、三河の松平が食うてしもうわい」

とばかりに、大いに食指を動かしたわけだが、義信は今川家から夫人をもらっている。氏真の妹がそれだ。大いに反対したろう。また飫富兵部は以前信玄が父の信虎を駿河に追い出した時、板垣信形とともに主として工作したのだ。今川家だってただで力を入れるわけはなく、必ずや相当なことを約束させたろう。おそらく、その約束の中には、末長く今川家の恩義は忘れないというのもあったろう。板垣信形すでに死に、約束の責任者としては自分ひとりが生きのこっている飫富としては、今川氏経略など忍びないものがあって、相当根強く反対したと思われる。

つまり、信玄は駿河か、むすこか、の二者択一の立場に立たされたので、むすこを殺し、駿河を選ぶことにしたのだと思う。金色夜叉のお宮は恋人を捨ててダイヤモンドをえらんだが、信玄は若い時には父親を追い出して甲州をとり、妹聟を殺して諏訪をとり、晩年にはむすこを殺して駿河をとろうとしたという次第。首尾一貫している。勝頼の悪計などあったとは思われない。勝頼はこんな悪辣な根性の人であったとはぼくには思えない。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

しかし、ともかくもこれで武田家のあとつぎである義信が死んだので、勝頼があとつぎ的立場になった。あとつぎ的立場などとややこしい言い方をしたのは、あとつぎに確定したわけではないからである。

この少し前あたりに、勝頼は伊奈郡の郡代となって高遠城をあずかり、「伊奈四郎勝頼」と通称するようになったと、甲陽軍鑑にある。一般にはこの名前の方が有名だ。

義信が切腹させられた翌年、織田信長は自分の姪——妹が美濃苗木の城主遠山氏に嫁して生んだ女——を養女として勝頼に縁づけている。これは信長の方から申しこんだ縁談だ。勝頼が信玄の愛子であり、あとつぎ的地位にあるからである。

三

織田家から嫁して来た勝頼の妻は、翌々年、男の子を生んだ。信玄は、

「おれが孫で、信長の孫だ。どちらに似ても器量抜群の名将となるはずじゃ」

と、大満悦で、まだ産室に入っている間に「武田竹王信勝」と名づけ、武田家のあとつぎに定めたという。

勝頼をあとつぎにしなかったのは、すでに諏訪氏をついでいたからであろう。諏訪氏の名跡なぞ、誰か代りの者、たとえばやがて生まれるであろう勝頼の次男を立てるか、諏訪一族の者もいるのだからその者を立てるかすればいいようにわれわれには思われるが、それでは諏訪氏の遺臣らが承知しないという事情があったかも知れない。あるいは、諏訪ご前にたいする信玄の追慕の情が深かったためかも知れない。ぼくは信玄の諏訪ご前にたいする寵愛は最も深いものがあったという解釈だから、この方をとりたい。

信玄が勝頼の人物に不安を抱いたためとか、老臣らが勝頼の人物をきらって反対したからとかいう古来の説は、承認出来ない。信勝があととりとなれば、その実父である勝頼が実権をにぎるようになることはわかり切った話であるからだ。

竹王信勝が生まれてから三年目の初夏、信玄が死んだ。

信玄は末期に、

「あとつぎは信勝じゃぞ。勝頼これを後見せい。信勝が十六になったら、勝頼は隠居せい。越後の謙信とは講和してよろしく頼め。あの男は一旦承知したら、必ず力になってくれる男じゃ。そうすれば、信長も、北条も、恐れることはないぞ」

と、遺言して死んだという。つまり、信玄は保守せよと遺言したと見てよい。勝頼はこの遺言に従って、上杉氏と和親策を講じ、また北条氏政には妹をつかわして和親している。

しかし、勝頼は天性勇猛な男だ。一時は亡父の遺言を守る気になっても、天性の猛気が保守にとどまらせはしない。次には、すぐれた父親を持った人間は大てい劣性コ

ンプレックスを持っているものであるが、それが勝頼にもあった。第三に、信玄以来の老臣らの勝頼にたいする態度が、常にその劣性コンプレックスをかき立てた。いつの時代でも老人というものは昔の方がよかったと思っている者であるが、実際においても勝頼は信玄におとる。勝頼は決して阿呆ではなく、相当以上にすぐれた素質のある武将ではあったが、信玄にくらべれば何としても見おとりがする。老臣共はいつもそれを言い立てる。

「先君はそういう場合には、そうはなさいませんでした」

「それは先君の規模と違い申す」

「先君は……」

などと、ことごとに言う。口うるさい姑や小姑のようなものだ。

勝頼がおとなしい男なら、その言うことを聞いて、一分も父の遺言に違わないことを心掛けたであろうが、天性の猛気があり、武勇に自信もある。

「先君、先君と、馬鹿の一つ覚えのように言う。昔と今とは時勢がちがうわい」

と、反撥心の出て来たのは、最も自然なことである。

「おやじ様のえらかったことは、おれも認めるが、おれじゃとて、おやじ様に負けはせぬぞ」

と、信玄にたいしても負けじ魂がおこったろう。

勝頼は、長坂釣閑・跡部勝資らの姦佞な人物を重用し、信玄以来の忠実老巧な老臣らを疎んずるようになったというが、以上の記述をお読みになった方々は、そうせずにおられなかった勝頼の気持は十分に理解出来るはずである。長坂や跡部が姦佞な人物であったことは、あとでわかるのであるが、この時の勝頼としては、自分の意見に常に賛成してくれるこの二人がありがたかったことは大いに理解出来るであろう。

勝頼が保守策を捨て、しきりに四隣に兵を出して積極進取をこととするようになったのは、こういう心境からであったと、ぼくは解釈する。つまり、彼の敵は家康でもなければ、信長でもなく、北条でもなく、亡父の名声であったわけだ。彼の以後の生涯は、これとの血みどろな戦いであったのだ。

四

父の死後、勝頼が最も敵視したのは、徳川家康と織田信長であった。信玄がこの両氏を蹴破って上京しようとして戦っている半ばで死んだというう らみもあったろうが、

「父のとげることの出来なかった、上洛して天下に号令することをおれがやって見せてやろう」

という心も大いにあったのであろう。彼がこれをなしとげることが出来れば、決して父におとらない、いやいや、父まさりであるという証明になると考えたのかも知れない。

信玄の死んで十カ月目、天正二年二月、彼は美濃に出陣

し、明智城をはじめとして、織田方の十八城を攻めおとしたと、甲陽軍鑑にある。明智城は別として、その他は城とは名ばかりの、砦程度のものであったろうが、とにもかくにも十八城だ。武田方は大いに得意になり、「ご代がわりの最初のご出陣にこれほどの戦果、勝頼公のおん勢い、飛ぶ鳥もおつるばかりであると勇み立った」と、軍鑑にある。勝頼が猛将であったことは疑いないのである。

次には遠州へ兵を出した。これは徳川家が最初しきりにこの方面の武田方の城をおとしいれたり、武田方に従っていた土地の豪族らで家康に寝返りを打つ者が次々に出たりしたからでもあった。

話は少しかえるが、今川義元の死後、武田信玄は家康のところに使いをつかわし、

「以後、両家永く誼を通じ申そう。ついては、遠州は大井川を境にして西は貴家において切取り次第になされよ。東は武田家において頂戴いたす」

と、分割案を提議した。家康はもちろん承知した。この約に従って、家康は大井川以西を切取ったのであるが、信玄がこんな約束をしたのは、自分の駿河経略に横から邪魔されないためなのだから、駿河を経略しつくせば、西に鋒先を向けるのは彼にとっては既定の方針だ。しきりに遠州の諸城をとり、ついに三方ガ原合戦となる。この戦さで、徳川、織田の連合軍を痛破したので、東遠江の城々はあらかた武田家のものになった。だから、信玄の死後、家康が遠州に兵を出して諸城をとったのは、失地回復のつもりだったのだ。しかし、勝頼にこれががまん出来ないことは言うまでもない。とりわけ、東美濃の十八城を時の間におとし入れて、意気大いにあがっている時だ。

「なにほどのことがあろう。東美濃のごとくしてくれむ」

とばかりに遠州に入り、長篠近くの大野田新城をとり、道を転じて東に向い、高天神城を攻囲した。山上に天神社があるので、この名前がある。この城は信玄も攻めおとすことの出来なかった堅城だし、城主小笠原与八郎長善は剛勇の男だし、よく防いだ。勝頼は家康と信長の援軍が来ると聞いて、その到着前に攻めおとす決心をした。自ら攻め口にのぞみ、

「死傷をかまうな。無二無三に乗っとれ！」

と、火の出るばかりに叱咤して猛攻撃したが、なかなか落ちない。ついに調略をつかい、小笠原および随従の者らの本領安堵を条件として開城させた。力攻めで攻めおとすことの出来なかったのは残念であったろうが、とにかくも自分のものにしたのだ。

「見ろ、おやじ殿さえ手を焼いた城だぞ。おれのどこがおやじ殿におとるか」

と、言いたいところであったろう。競輪に夢中になって、女房子供を泣かし、家財を蕩尽する人が世間にはよくあるが、そのとりつかれはじめは競輪をやった当初に大穴をあてたことだという。勝頼が今やそれであった。東美濃

の十八城攻略は大穴、遠州の大野田新城と高天神城との攻略は中穴に匹敵する。これで戦争気ちがいにならなかったら、よほどに出来た人物だ。勝頼の運命はこの時きまったと言ってもよかろう。翌年は長篠に出陣して、ついに大敗するのだが、その前に書くべきことがある。

五

家康の家来に大賀弥四郎という者があった。元来の素姓は中間だったが、なかなかの才子で、経済の手腕があるので、次第に登用され、家康の家来中第一の権臣になった。江戸時代の大名も金づくりの上手な家来を大事にしたことは大野九郎兵衛にたいする浅野内匠頭の態度でもわかるが、戦国時代の大名だって、それは同じであった。戦争は金がかかる。金づくりの上手な家来を大事にしたはずである。

漢の高祖も実戦の将軍連より糧食の調達輸送や軍資金をこしらえることの上手である蕭何を重く待遇したので、将軍連が不平を言ったところ、高祖は、

「諸君は狩を知っとるじゃろう。狩には駆けまわって獲物を追い立てる犬も必要じゃが、これを働かせる人間も必要じゃ。諸君は犬、蕭何はその人間なんじゃよ」

といったという話がある。

さて、この大賀弥四郎という人物、才子は才子であったが、才ばかりでとりとめた道義心のない男であったので、次第に増長し、ついに途方もない野望を抱くようになった。徳川家にかわって大名となろうという心をおこしたのだ。よりより目ぼしをつけた者を語らって一味に引き入れ、勝頼に密書をおくった。

「先ず作手（長篠・新城の西北方の山谷地帯）までご出陣あって、ご先鋒の二、三隊を岡崎へ進め給え。さすれば、拙者は徳川殿（家康）のお出でであると呼ばわって、城門を開きましょう。すなわち乗り入って信康殿（家康の長男、当時岡崎城を守る）を殺されよ。岡崎城には三河・遠江の諸豪族らの人質が多数とってあります。これらをおさえなさることになりますれば、豪族らも心ひかれてお味方するでありましょう。そうなれば、徳川殿は孤立無援となり、浜松城に居たたまらず、尾張か伊勢へ立退かれるでありましょう」

勝頼がよろこんだことは言うまでもない。刃に血ぬらずして三・遠が手中のものになると思った。早速に、大賀以下一味のものに、

「こと成就の上は所領十倍を授け、恩賞もっとも重かるべし」

と、誓紙を送り、作手に出陣した。

この少し前あたりであろう。多分晩酌かなんぞのあと、ほろほろといいきげんになってからのことであろう、大賀は女房に、

「近いうちに、わしは大出世をする。汝はみ台様といわれ

るようになる」
と言った。
女房はもとより本当とは思わない。酒興しての冗談だと思うから、こう答えた。
「そりゃ、ありがたいことでんな。どがいにしてですかえ」
「むほんする。その手だてはしかじか」
女房はきもをつぶした。
「あんた、それほんまでござるかや」
「汝にじょうだん言うても、三文の得にもならん」
「とんでもないことでんがな、それ。あんたは中間からご譜代衆さえおよばぬほどの出世をしながら、そがいなことをたくらむなんど、人間のすることではありませんがな。天罰はてきめん、わが身も女房子供も火あぶり、さかばりつけになるは目前でござるべし。わしゃいやでござる。そがいな目にあうより、今ここで刺し殺されたがましじゃ。さあ、殺してくださろ」
と、泣き出した。
「女子供の知ったことでない。まかせておけ。きっと汝をお城の奥にすえて、み台と言われるようにしてみせるでな」
「それが出来ることなら、めでたいことでござるが、世の中ちゅうものは、企てたことが全部成就するものではござらぬ。大方は不首尾におわるが常でござるだ。不首尾の時のおそろしさを考えなさろ。仏法は実が入れば傾き、人間は実が入れば反るというが、あんたのことですわいな」
と、女房は一層泣きくどいたと、大久保彦左衛門の三河物語にある。
田舎女ながら、この女房はなかなかの賢女だったようだ。仏法云々などまことに味のあることばだ。宗教は盛んになると本質を失って堕落し、人間は盛運になると驕慢になり、ついに亡滅をとるという意味であろう。いいことばだ。

六

大賀弥四郎のこの密謀が露見した。一説では一味の山田八蔵という者が後悔して、信康に委細を訴えたといい、一説では近藤某が戦功があって加増にあずかることになり、その加増地のことについてくわしい話を聞くために、大賀のところへ行くと、大賀は、
「ご辺がこの度ご加恩にあずかることになったのは、わしがおとりなししたためじゃ。ありがたいと思わっしゃるなら、今後わしに疎略があってはなるまい」
といった。近藤は剛直な男だ。武士の資格は武勇だけだと思っている。大賀のようなそろばん勘定の達者だけでなり上ったばかりか、威張り返っている人物はその最もきらいとするところだ。主君がわが武功を愛でられたと思えばこそ、いやをこらえて顔を出したのだが、この加増がこのいやなやつのとりなしによって下賜され、このいやなやつ

にこれからも感謝せねばならぬと強要されては、がまんが出来なかった。ものも言わず、あらあらしく立上ってかえり、浜松に出かけ、老臣のなにがしの宅に行き、

「思う子細ごされば、この度ご加増賜わった知行地、返上申し上げます」

と、語気もあらあらしく言った。

老臣はおどろきながら問うた。

「だしぬけで一向わからんが、どうしたのじゃ」

「大賀弥四郎め、しかじかと申しました。われらいかに貧困であればとて、あの弥四郎ごときに追従して知行地を加増してもらいとうござらぬ。やつが言うたようなわけでの恩命なら、一坪もほしゅうござらぬ。受けてはさむらいの恥でござる。お咎めこうむって腹切ってもかまい申さぬ。平におことわり」

と、すさまじい形相だ。

老臣はこれを家康に言上した。

家康は近藤を召し、

「決して大賀の言うようなわけがあってのことではない。おれはそなたに昔約束したことがある」

と、昔の話をした。それは家康がまだ今川家に人質になっている頃のことである。家康が今川家から一時ひまをもらって岡崎に帰休して、領内を巡視すると、ちょうど田植時で、苗代田のあぜ道に腰のものをおき、百姓らにまじって苗をとっている近藤の姿が目についた。当時、徳川家の領地は今川家から代官が来て治め、徳川家の家臣らの知行地にまで重税を課したので、家臣らは生活に窮し、国を離れて他国に奉公口をさがしに行く者が多数あり、のこっている者は自ら鋤鍬をとって耕して、やっといのちをつないでいたのであった。近藤もその一人だったのだ。近藤は家康の来るのを見て、大小をかくし、顔に泥を塗って、気づかれずに家康をやりすごそうとしたが、家康は早くも見てとり、

「ここへ来よ。ここへ来よ。かくれたとてわかるぞよ、近藤」

と、側へ呼びよせ、

「難儀をさせることよ。わしが一人前になったら、そなたらにかような仕事はさせまいぞ」

と、涙ながらに言ったので、近藤も涙をこぼして感激した。家康はその話をして、

「古い話じゃが、よも忘れてはいまい。おれはその時の約束を果してやろうと、いつも忘れたことはなかった。この度そちに戦功があったので、あの約束を履んだのだ。弥四郎などが何を知ったことか」

と言ったので、近藤は感涙にむせんで、ありがたく加増を受けた。

このことはこれですんだが、家康の胸裡には、さしも信用しきっていた大賀弥四郎にたいして、油断のならぬやつめ、単なるおごり沙汰とは思われぬ、どうやら、党与をつ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c